



(前) 埼玉県立歴史と民俗の博物館館長

高橋 一夫

78 期史

経過 昨年の5月か6月頃だったと思う。野口英世記念館の住田高市さんから、博物館関係者の院友会を開催したいので協力して欲しい旨の電話があり、秋に世話会を開催したらどうかといった。7月2日、住田さんから電話。先輩たちに秋に集まりたいと連絡したところ、「もっと早く集まるように」との指示があったので、7月23日に集まることにしたいという。

第1回世話会は上野で開催。山本信吉・島津晴久・米田耕司・松浦淳子・青木繁夫夫妻・石川博幸・住田氏と高橋の9名が集まり、11月12日に開催することを決定した。だが、事務局をどこに置かがいつも問題になる。その話が出たので私が引き受けることにした。この時、博物館関係院友会の開催を最初に言い出したのは誰か尋ねたところ、加藤先生は前々からこの構想を持っていたと、石川さん。この話を聞き、心して準備をしなければと、気を引き締めた。

8月5日、考古学関係者の院友会(若木考古会)が大学で開催された。その際、博物館関係者の院友会を開催することを宣伝した。その後、9月3日に第2回目の世話会が開催され、名簿の点検、発起人の選出を行い、9月15日の第3回世話会では下津谷先生も出席し、案内状の文言検討、講師の選出、式次第、さらに発起人の追加等を行う。看板・写真・料理の手配は、若木考古会でいつもお世話になっている大島敏史さんをお願いすることになった。さらに、学長、院友会長と樋口先生の奥様、加藤先生の奥様に御来賓として御出席をお願いすることになった。そして、発起人代表は青木教授に、北海道から沖縄の27名に発起人をお願いし、みなさんに快諾していただいた。

会を開催するにあたり基本となるのが名簿である。最新のデータを誰も持っていないので、名簿づくりに苦労した。博物館学紀要掲載の名簿や若木考古会の名簿、世話人の情報をもとに、400名ほど把握し発送したが、70通ほど宛先不明で戻ってきた。

開催当日 11月12日、渋谷キャンパス若木タワー地下会議室で13時から開催された。安蘇谷学長、院友会の宇井常務理事、加藤先生の奥様を来賓としてお迎えし、御挨拶をいただく。樋口先生の奥様はお元気であるが、外出して大勢の人にお会いすると、その後疲れがどっと出るからと御欠席であった。なお、参加者は北海道から沖縄までの90名ほどであった。

下津谷先生に「博物館学開設の頃」と題して講演をいただいた。その内容は、「1 博物館学講座開設以前、2 博物館学開講(昭和32年)の理念と特色、3 樋口先生の提言 ①学芸員教諭の必要性和学校博物館法の制定、②博物館講座開設大学は博物館必置、③学芸員の社会性確立」で、樋口先生の先見性を再確認する。下津谷先生の講演は、多くの参加者に学生時代を思い出させたようだ。続いて、(前)千葉県立美術館館長の米田耕司さんの「ミュージアム再生をめざして」の講演。「いま、博物館は冬の時代と言われているが、『老幹新枝』という言葉がある。國學院大学の博物館講座の伝統に裏打ちされた根を張った太い幹に、ミュージアム再生の博物館学の理論と実践による新しい枝を絶えず伸ばして行こうではありませんか」と結んだ。まさに、本会の目的のひとつもここにある。

15時過ぎから若木タワー18階の有栖川記念ホールで懇親会を開催。まずは集合写真を撮影し、懇親会となる。懐かしい顔・顔・顔。昔話に花が咲き、旧交を温めた。また、こんなにも大勢の方々が博物館界で活躍しているのかと驚く。当日は風が強かったので、会場から東京中が眺望でき、大島も見えたが、なんとといっても夜景がきれいだった。また、変わりゆく大学にも目を見張った。

課題 第1回は盛況裡に開催することができたが、問題は今後の会のあり方である。博物館学講座から育った院友は、全国の博物館で活躍している。学芸員にとって、顔が広いことは業務に大いに役立ち、顔見知りとなれば調査や資料の貸し借りはスムーズに行く。院友となればなおさらである。そういう点で若い学芸員は本会を有効に活用していただきたい。

12月17日、世話会会の反省会があった。当然、会のあり方について検討がなされ、発展性のある会にしたいという点で意見が一致した。今後、会をどう発展させていくか、プロジェクトチームを作り検討することになった。

本創刊号を見て、本会開催の案内状が届かなかったという方が大勢おられるかと思う。名簿の整備が急務なので、是非とも情報を博物館学研究室ないしは高橋までお知らせいただきたい。さらに、多くの院友が集まる有意義な、そして大学を応援する会にしたいと思う。

事務局 340-0053 草加市旭町1-4-13

高橋 一夫



会場風景